

質問紙調査を通して見る大学生の音楽教育観ならびに音楽教師像

瀧川 淳・古山 典子*

University students' views of music education and music teachers

Jun Takikawa, Noriko Koyama

(Received September 30, 2016)

1. 問題の所在と研究の目的

本稿は、初等教育における音楽科の意義や音楽教師に必要な知識・技能について、大学生がこれまでの経験からどのように捉えているのかを質問紙調査をもとに明らかにすることを目的としている。

教科としての音楽は、表現活動（歌唱や器楽、音楽づくり）の指導が大部分を占めているためか、教え－学ぶの関係が実感されにくい。しかし6年間の音楽授業を通して養われるべき「豊かな情操」は、単に「楽しかった」だけでは養うことはできず、クラスメートたちとの様々な音楽経験を通して、自らの感性を豊かにし、音楽的な技能を高め、知識を得ることで養うことができると考える。

ところが、実際には「楽しかった」という気持ちがいざ実際、音楽を「学んだ」という意識は希薄なのではないだろうか。音楽教師も楽しく元気な活動を目指していることが多いように思われる。

では、教師を目指す学生たちはどのような意識で音楽を学んでいたのか。そこに学びは自覚されていたのだろうか。また彼・彼女らにとって音楽教師はどのような存在だったのか。本稿では、これらの問いを大学生への質問紙調査を通して明らかにする。

なお、本論の執筆分担は、以下の通りである。瀧川が1, 2, 3 - 1) ~ 3), 及び4を担当し、古山が3 - 4), 4を担当した。

2. 先行研究について

教える側に立つ音楽教師への質問紙調査の分析は多く見られるが、学習者もしくは元学習者たちを対象とした質問紙調査は多くない。

学習者への質問紙調査としては、まず日本音楽教育学会が2014年に実施した小中高の児童生徒への質問紙調査¹が挙げられる。これは「『音楽についてこう思う!!』『音楽について言いたい!!』学習者アンケート」と題して、Web上で実施されたものである。

また小学校音楽に関する大学生への質問紙調査を行った先行研究としては、小学校教員養成課程の1～4年に在籍する400名へ質問紙調査を実施した森村(2012)の研究がある。これは音楽科授業で専科教員の有無によって指導内容に違いがあるのかを明らかにするために行われた。

また筆者らも、音楽学部と教育学部に通う学生へ質問紙調査を行い、彼女・彼らの考える音楽教師観について2011年の日本音楽教育学会全国大会で発表を行っている。

さらに学校教育全体に対する大学生への質問紙調査としては、教師の理想像や尊敬する教師像を明らかにした松永(2015)や、ベネッセ教育総合研究所が教師文化のあり方の継承を明らかにするために2000～2001年にかけて400人に対して行った質問紙調査²が挙げられる。

3. 質問紙調査の結果と考察

1) 質問紙調査について

本調査は、教職を目指す学生を対象に、熊本大学教育学部の2016年度入学生で「小学校音楽I」(瀧川担当)を受講する学生209名、中国地方公立大学教育学部の2015年度入学生で、小学校教諭免許状取得にかかわる科目(古山担当)を受講する学生27名、また近畿地方の私立大学で「音楽科指導法」(古山担当)を受講する学生44名、延べ281名に行った。質問紙調査の実施時期は、2016年7月～8月である。なお

* 福山市立大学教育学部

アンケートの内容は、「6. 資料」を参照されたい。

2) 質問紙調査対象者の内訳

2-1) 目指している校種ないし職種

調査対象とした学生の内、現段階で小学校教員を目指している学生が144名(51%)内1名は幼小のいずれか、また中学校教員を目指している学生が90名(32%)、そして小中高いずれかの教員を目指している学生が5名(2%)である。そのほか、それ以外の校種や職業を目指している学生は35名(12%)おり、6名(2%)が未回答もしくは未定であった。なお、それぞれの校種や職業には、特別支援学校の教員や幼稚園教諭、また一般企業などが含まれている。

2-2) 小学校で専科が音楽を担当していた割合

小学校の時に音楽の専科教員に音楽を習った経験のある学生は175名(62%)、全科の教員が音楽も担当した学校に在籍していた学生は79名(28%)、覚えていないと答えた学生は24名(9%)、また無回答が3名(1%)であった。

平成25年度に総務省で実施した「学校教員統計調査」³によれば、担任教科別の教員構成で音楽を担当する教員の割合が7.5%であることから、今回の調査で対象となった学生が小学生時代に専科による音楽授業を受けた割合は非常に高いと言える。

3) 大学生の考える音楽授業観

3-1) 音楽授業はどのような場か(設問1)

学生に自分たちが受けてきた小学校の音楽授業がどのような場であったかを、上位2位まで回答してもらった。その結果が表1である。

表1. 学生の考える音楽授業という場

みんなと一緒に音楽する場	125
音楽の知識を身につける場	49
息抜き場	34
普段接することのない音楽に触れる場	27
音楽表現の技術を身につける場	15
音楽を理解する場	11
その他	5

音楽授業は「みんなと一緒に音楽をする場」(47%)であると考える学生が過半数を占めている。音楽は一人でもできる芸術であり、個人で習っている場合には一人で演奏する形がほとんどだが、小学校においては集団で一つのものを作り出す場として認識されていることが伺える。また筆者らが設定した設問では、「音楽の知識を身につける」場が18%と2番目に多かつ

たが、残念ながらそれが音楽の理解に繋がっていないことがうかがえる。

3-2) 音楽の役割(設問3)

では、上記のような場で学んだ(演奏した・聴いた)音楽はどのような役割を持っていると学生は感じているのだろうか。自由記述の回答から295のキーワードを抽出し、類似性のある22のカテゴリーに分類した。その結果は、表2の通りである。

表2. 音楽授業の役割

協調性(一体感・協力)	66
楽しむ	65
音楽経験を広げる・興味を持つ	28
感性(感受性)を豊かにする	25
気晴らし・息抜き・安らぎの時間	24
表現を身につける・豊かにする	22
心を豊かにする	13
コミュニケーションのツール	10
想像力・創造力・発想力を高める	8
正しい音感・リズム感を身につける	8
生活を豊かにする	5
音楽の理解	4
文化としての音楽に触れる	3
感動する心を養う	2
積極性を育む	2
芸術的センスを育てる	2
他者を理解する(感性で)	2
教養を身につける	2
考える力が身につく	1
やり遂げることを覚える	1
欠かせないもの	1
話題づくり	1

本設問から以下のような傾向が浮かび上がってきた。まず「協調性(一体感・協力すること)を育む」と「楽しむ」との回答がそれぞれ22%で、この2つの回答が全体の約半数の意見を占めた。5位には「気晴らし・息抜き・安らぎ」の時間が挙げられている。自由記述からは学校で学ぶ音楽の役割が、リフレッシュや楽しさにあるという点が浮かび上がった。これらの結果と設問1との矛盾は見られない。そのほか「表現力を豊かにする」(22件)や「想像力・創造力・発想力を高める」(8件)といった意見も見られた。

3-3) 音楽で学んだ曲について(設問2)

次に、音楽の授業で学んだ曲について学生に自由に

書いてもらい、192のキーワードを抽出し、26のカテゴリに分類した。その結果は表3に示した通りである。

表3. 授業で学んだ曲についての印象

楽しむ・好き・よかった	59
いろいろなジャンル、楽器、音楽に触れることができた	18
知らない曲が多い（特にクラシック）	17
覚えていない	12
思い出になる（今でも歌う）	10
鑑賞は退屈だった（感想を書くのが嫌だった）	9
みんなが知っている曲が多い	7
鑑賞が楽しかった	6
もう少しメジャーな（最近の）曲が歌いたい	6
楽器に触れることができた	5
音楽は生きていく上で必要だということ（落ち着く、心が豊かになる）を学んだ	5
伝統音楽に触れる	5
古い曲が多い	5
リコーダーが難しい（嫌い）	4
他者とのつながりを深める	4
良い曲	3
文化を知る	3
心に残る	2
音楽に興味を持つきっかけ	2
嫌い	2
表現力がつく	2
感受性がつく	2
親しみやすい	1
大切	1
今でも歌いたい	1
苦手	1

先の設問と同様に、多くの学生が、授業も、そこで学んだ曲に対しても「楽しかった・好き・よかった」(31%)という印象を持っている。一方で、学んだ曲を「覚えていない」(6%)、「鑑賞が退屈だった」(5%)といったネガティブな意見も見られる。このような相反する意見が上位を占めているのは、音楽の授業は、その場の楽しみが得られるものの学びにつながっていない、ということではないだろうか。

また「知らない曲が多い」(9%)や「もう少しメジャーな（最近の）曲が歌いたかった」(6%)という意見からは、知らないことを学ぶのではなく、誰もが知っている曲をみんなで歌ったり演奏して楽しむことが音楽の授業だと認識していると推察できる。

3-3) 一番印象に残った音楽授業（設問5）

音楽授業の中で、とりわけ印象に残ったのはどのような授業だったのだろうか。自由記述から272のキーワードを抽出した。その結果は、表4の通りである。

表4. 一番印象に残った音楽授業

合奏	78
音楽会に向けての練習	38
合唱	37
リコーダー	30
歌唱	14
発表	13
器楽	11
和楽器（箏）の演奏	6
エーデルワイス	6
コンクールに向けての練習	5
歌に振りを入れて歌う	5
鑑賞	4
外部の指導者が来たこと	3
一人ずつの歌のテスト	3
鍵盤ハーモニカの演奏	3
先生がギターで演奏した	2
民族音楽の鑑賞・演奏	2
歌に劇を入れた	2
魔王を聞いた	2
オーディション	1
手を叩いてリズムをとる	1
完成させた達成感	1
伴奏をした	1
手作り楽器を作った	1
替え歌を作った	1
曲を作った	1
ヴァイオリンを演奏した	1

この結果から、合奏(29%)や合唱(14%)といったクラスが一体となつて一つの作品を作り上げる授業に対して、学生たちは強い印象を持っていることがわかる。また回答の中に、いろいろな楽器(リコーダーや鍵盤ハーモニカをはじめ、合奏で使われる楽器や和楽器など)に触れることができた授業が印象的だったと述べる学生が多くいた。このことが、合唱よりも合奏により強い印象を持つ学生が多くなった原因と考えられる。

作品の発表そのもの(5%)よりも「発表会に向けての練習」(14%)が印象深いことについては、目標に向かって作品を作り上げていく過程で学生たちがより深く音楽の授業に関わっていたことを表している。

う。

さらに一つひとつの意見は少数だが、いろいろな楽器を「初めて」見たり触ったりした授業が印象的だったと答えた学生も多くいた。また特定の楽曲では、〈エーデルワイス〉を挙げた学生が複数いた。〈エーデルワイス〉は、〈ドレミの歌〉などを含むミュージカル《サウンド・オブ・ミュージック》の中の1曲である。この曲は、低学年で鑑賞教材としてよく使われ、4年生ではリコーダー教材として教科書に掲載されている。鑑賞で馴染んだ歌を器楽で演奏して深める体験が、学生たちの印象に残った理由と考えられる。

3-4) 音楽の授業は好き・嫌い (設問6)

学生たちは、自分たちが受けた音楽授業をどう思っていたのだろうか。

学生に小学校の時に受けた音楽授業が好きか・嫌いかを単刀直入に尋ねてみた。その結果は、図1の通りである。

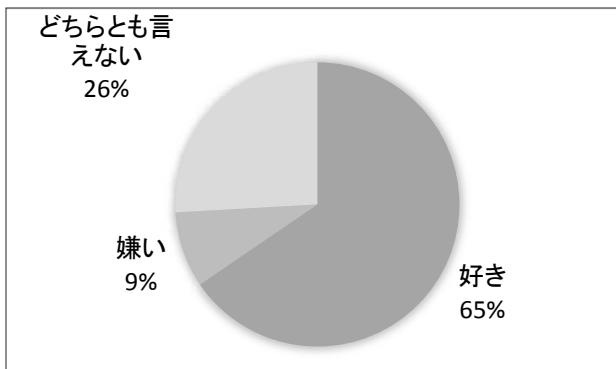


図1. 音楽の授業が好きか・嫌いか

本設問の有効回答数は278である。「好き」が182名(65%)で、「嫌い」(9%)と答えた学生は少ないが、「どちらとも言えない」と答えた学生72名(26%)と合わせると、35%の者が「好きではない」と答えている。そう思う原因はどこにあるのだろうか。

この設問では、上記回答の理由を記述してもらった。それらの結果は表5~7の通りである。キーワードの総数は、「好き」(表5)が187、「嫌い」(表6)が14、「どちらでもない」(表7)が47である。

表5. 音楽の授業が「好き」

楽しかったから	61
音楽(歌・楽器・鑑賞)が(もともと)好きだったから	57
合奏・合唱ができたから	17
活動的で主体的に参加できるから	13

先生が楽しい・よかった	12
音楽が得意だった・習っていたから	11
楽器が楽しかった	6
みんなで頑張れた(演奏できた)から	5
クラシックが聴けたから	1
好きな人が音楽好きだったから	1
リコーダーやテストは嫌いだけど、楽しかった	1
自分の声が出せる時間だったから	1
いろいろな曲を聴けたから	1

表6. 音楽の授業が「嫌い」

人前でのテストがあったから	3
先生が怖い・苦手なため	3
音楽は得意でないため	3
人前で歌うのが苦手	1
先生が歌わなかったので	1
楽譜が苦手	1
歌ばかりで楽器がなかったから	1
音痴だと言われたから	1

表7. 音楽の授業は「好きでも嫌いでもない」

歌は好きだが、楽器が嫌いなため	9
(音楽は好きだが)先生が嫌いだったため	7
好きな時も嫌いな時もあった	6
鑑賞は好きだが、表現活動は嫌いだったため	5
(楽器は)得意ではないけど、楽しかったため	4
音楽は好きだが、知らない曲ばかりだったため	2
(外で)習っていて、簡単なことや知っていることばかりだったため	2
音楽は好きだが、練習が面倒だったため	2
楽器は好きだが、歌は嫌いだったため	2
自分は好きだが、みんな歌わないことがあったため	1
演奏は楽しいけど、知識が面倒だったため	1
演奏がうまくできなかったため	1
どこが悪いのか指摘されないままに、何度も練習させられた	1
伴奏でおなかがいたくなるが多かったため	1
みんなより一人が好きのため	1
ぼーっとすることが多かったため	1
できるようになると飽きてしまうため	1

まず「好き」(表5)な理由として「楽しかった」(33%)、「音楽が好き」(30%)が圧倒的に多く、そのほかにも「得意だった」(6%)という意見も複数聞かれた。もともと音楽が得意で好きだから授業が楽しかったのか、音楽の授業が楽しくて好き・得意になっ

たのかをこのアンケートから推察することは難しいが、どちらの場合にもそもそも「音楽」に対して肯定的であるから授業も好きである、ということはいえよう。

次に「好きでも嫌いでもない」(表7)を見てみたい。この設問から音楽科の活動領域に起因する問題を伺うことができる。小中の音楽科は、表現と鑑賞の2つの活動領域に分かれており、さらに表現は歌唱、器楽、音楽づくり(中学では創作)の3つの活動内容に分かれている⁴。これは小中の9年間変わらない。「どちらでもない」と答えた者の多くが、ある領域は好きだが、他の領域は苦手ないし嫌いだったと答えている。苦手な領域をどのように学ばせるかが大きな課題と言える。

さて、音楽の授業が「嫌い」と答えた学生はどのような理由を持っているのだろうか(表6)。回答を見てみると、「嫌い」の原因で多いのは、「人前でのテスト」や「先生が苦手・怖い」など教師自身や指導法に起因するものが多い。「嫌い」の自由記述から抽出したキーワード14件の内、9件が上記理由に当てはまる。また「どちらでもない」理由の中にも「先生が嫌いだったため」や「悪い箇所を指摘されないままに何度も練習させられた」といった意見が見られた。

これらの意見から、音楽科では、指導法よりも教師との関係性や教師の人間性が授業に対する印象に大きく影響していることが明らかとなった。

4) 大学生の考える音楽教師像

4-1) 音楽授業で教えるべき事柄(設問8)

学生に「音楽授業で教えるべき事柄」とは何かについて選択肢を挙げて、上位2位まで回答を求めた。次に示す表9は、1位回答の集計結果である。

図2で明らかなように、将来希望する職が何かを問わず「音楽による表現を楽しむ」が突出して数値が高い。ここから学生たちは、音楽授業で「表現することを楽しむ」ことを重視していることがわかる。

一方で、「音楽に対する感性の育成」については、中学・高校の教師を希望する学生が8%に過ぎないのに対して、小学校教師希望学生が17%となっている。

次に、第2位回答の結果を図3に示す。

2位回答では、「音楽に対する感性を育成する」が33%でもっとも高い数値となった。1位回答では低かったこの項目が、2位回答で希望する職種に関係なく多くの学生に選択されている。次いで「協調性を育む」が25%となった。

音楽に対する感性の育成は、単なる知識、技術の習得だけでなし得るものではない。その場で鳴り響く音を介した総合的な音楽経験の中で学習者の内面、情動

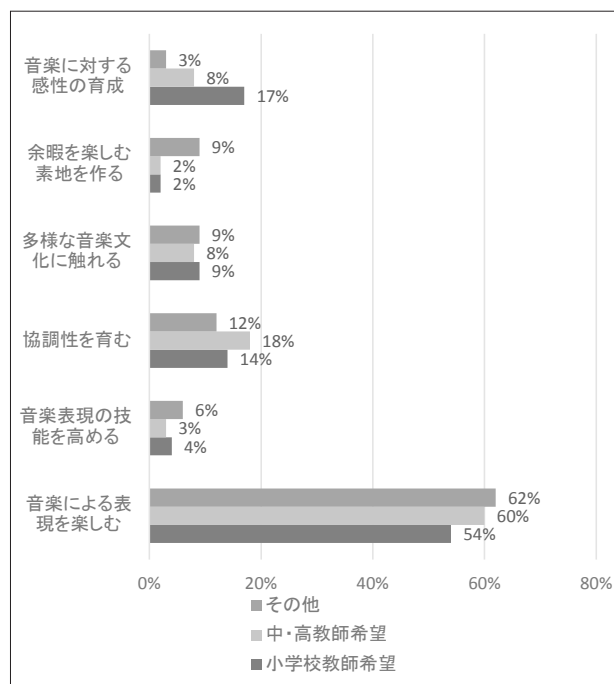


図2. 音楽授業で教えるべき事柄 (1位回答)

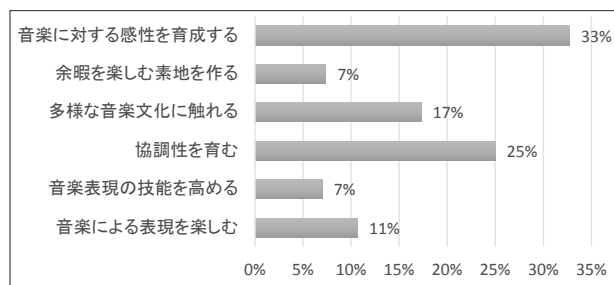


図3. 音楽授業で教えるべき事柄 (2位回答)

を揺さぶる音楽科の特徴を表している。また協調性は、合唱や合奏といった、一人ひとりの音への感性を擦り合わせ集団で一つの表現を作り上げる活動を多く行う音楽科の教育形態の特徴から期待される効果であり、学生たちが音楽科授業でそれらの育成を重視していることを示している。

表9の1位回答でも、表10の2位回答でも、「音楽表現の技能を高める」と「余暇を楽しむ素地を作る」が低い。ここから、音楽授業において表現技能を習得させることを重視していないことは明らかである。しかしその一方で、学校内外での余暇を楽しむための素地を育むことを音楽授業の主たる目的と捉えていないことがわかる。

4-2) 音楽の授業を行うために身に付けたい知識・能力(設問7)

学生が将来、音楽授業を行うために、身に付けたい知識・能力を自由記述で尋ねた。

その結果、とくに多かった回答が、ピアノを主とする楽器演奏の技能や歌唱力といった音楽実技能力であった(281回答中108名, 52%)。次いで多いのが、指導力に関する回答である(71名, 26%)。

これは、鍵盤楽器での伴奏や範唱の能力、あるいは楽器の演奏能力が、音楽授業を行う教師として求められていると学生が考えているのと同時に、学生自身が今後身に付けなければならない能力として、音楽実技能力の習得に高い関心を寄せていることが表れている。音楽実技能力が十分に身に付いていないことが学生自身にとって課題となっており、それを習得することが音楽を指導するにあたって必要だと捉えていることがわかる。

前項4-1)「音楽授業で教える必要のある事柄」で、音楽技能に関する回答が低いことと対照的に、教師としては音楽技能が習得できていなければ、「楽しい」授業を行うことが困難であること、そしてその「楽しさ」は、学習者にとっては表現技能の習得を伴わなくても実現可能なものである、と学生が考えていることがうかがえる。

また、「指導力」の具体的な内容として、音楽の楽しさを教える方法を身に付けたい、との記述が目立つ。それと同時に、「楽しく学ばせるための方法」を求める記述も多い。音楽授業は楽しいものであるべきである、と考えられている傾向があるが、その「楽しさ」がどのような楽しさなのか、何によって得られる楽しさなのか、といった「楽しさ」の質を問う必要がある。

4. さいごに

本調査での各設問を個別に分析することで、大学生の考える音楽教育観や音楽教師像を浮かび上がらせることを試みた。

その結果、音楽授業が学びよりも楽しさを重視されていること、また教師の存在が教科の印象に大きく影響することが改めて明らかになった。さらに新しいことを学ぶ場としてではなく、知っている曲をクラスメートと一緒に歌う・演奏する場として認識していることも浮かび上がってきた。これは、音楽を学ぶ喜びや楽しさを学生たちがあまり感じてこなかった結果と言えるのではないだろうか。

学生による音楽教師像としては、音楽授業は楽しいものでなければならない、そのためには教師として音楽表現技能を身に付ける必要性を強く感じていることが明らかとなった。

学生が自ら受けた音楽授業への印象と、これから教師になろうとする学生の持つ音楽教師像は、「楽しい

授業」をする、みんなと一緒に「音楽による表現をする」という意見で一致している。一方で、自身の受けてきた授業が息抜きや気晴らしをする場であったのに対し、目指される音楽教師像では、自身の音楽的技術の向上や指導力を持つことが大切だと認識していることが明らかとなった。

今後の課題として、設問間の相対関係を明らかにし、また都道府県別で音楽教育観や音楽教師像に違いが出るのかを明らかにしていきたいと考える。また、これらの結果を踏まえて、教員養成において教えるべき音楽科教育の知識・技能への示唆を得たい。

5. 参考文献

- 1) e-Stat「平成25年度学校教員統計調査」(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001058721&cycode=0,2016/09/12> にアクセス)
- 2) Child Research Net「教師観研究報告書」(http://www.crn.or.jp/LIBRARY/TEACHER/T_W/REPORT/index.html, 2016/09/12 にアクセス)。
- 3) 森村祐子「小学校音楽科教育における一考察 - 学生への質問紙調査から見る教員の指導内容について -」, 『学校音楽教育研究』16号, 271～272頁(2012)。
- 4) 日本音楽教育学会編「『音楽についてこう思う!!』『音楽について言いたい!!』学習者アンケート」(http://xn--6oqq31akwh8pa94cx0fi79cv40b.com/pdf_files/view/165, 2016/09/10 にアクセス)。
- 5) 松永幸子「教職を目指す学生の教師についての意識 - 教師という仕事の魅力と児童生徒とのかかわり方, 研修とプライベート, 今後の教師のあり方にかかわって -」, 『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』第15号, 67～76頁(2015)。

6. 資料

学生には、下記の質問紙調査を行った。質問紙調査を行う際には、回答結果を統計的に処理し考察するため、個人や団体が特定されることはないこと、また本研究にのみ使用することを明記し、伝えている。

音楽授業と音楽教師に関するアンケート

- 0) 今現在、将来目指している職種を以下から選んで○をしてください。

・小学校・中学もしくは高校・その他（ ）

謝 辞

- 1) 音楽授業はあなたにとってどのような場でしたか。
もっとも当てはまるものに○をしてください。
 - a. 普段接することのない音楽に触れる場
 - b. みんなと一緒に音楽する場
 - c. 音楽表現の技術を身につける場
 - d. 音楽の知識を身につける場
 - e. 音楽を理解する場
 - f. 息抜きをする場
 - g. その他（ ）
- 2) 音楽授業で学んだ曲（歌唱・器楽・鑑賞）についてどう思いますか。
[自由記述]
- 3) 音楽授業は、小学校の学校生活でどのような役割を持っていると考えますか。
[自由記述]
- 4) 小学校の音楽授業は専科教諭（音楽の先生）による授業でしたか
はい（ 年から）・いいえ・わからない
- 5) 小学校の時に、一番印象に残った音楽授業の内容を教えてください。
[自由記述]
- 6) 小学校で受けた音楽の授業は好きでしたか。それはなぜですか。
好き・嫌い・どちらとも言えない

理由 [自由記述]
- 7) あなたが教師になって音楽の授業を行うために、これから身に付けたい知識や能力は何ですか。
[自由記述]
- 8) 音楽授業で教える必要のある事柄について下記から上位2位を選んでください。
 - a. 音楽による表現を楽しむ
 - b. 音楽表現の技能を高める
 - c. 協調性を育む
 - d. 多様な音楽文化に触れる
 - e. 余暇を楽しむ素地を作る
 - f. 音楽に対する感性を育成する

本研究は、JSPS 科研費 26381240 の助成を受けて行っている。

- 1 アンケートの設問ならびに結果は、日本音楽教育学会のホームページ (http://xn--6oqq31akwh8pa94cx0fi79cv40b.com/pdf_files/view/165, 2016/09/10 にアクセス) を参照のこと。
- 2 詳細は、ベネッセ教育総合研究所 Child Research Net 内「教師観研究報告書」(http://www.crn.or.jp/LIBRARY/TEACHER/T_W/REPORT/index.html, 2016/09/10 にアクセス) を参照のこと。
- 3 e-Stat「平成 25 年度学校教員統計調査」(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001058721&cycocode=0>, 2016/09/12 にアクセス)
- 4 表現領域の音楽づくりは、平成元年改訂の小学校学習指導要領で「つくって表現する」という文言が追加され、平成 20 年度改訂の学習指導要領では新たに活動内容として設定された。今回アンケートを実施した対象となる大学生は、基本的に平成 10 年度改訂の学習指導要領に基づいて学んできているが、平成 20 年度のそれとの移行期間でもあり、いわゆる音楽をつくる活動を経験している学生としていない学生が混在していることが考えられる。